平和を願って…

郡山市立富田中学校２年　Ａ．Ｉ　さん

１　はじめに

長崎に原発が投下され69年。当時の状況はある程度は知っていたが、よく理解はしていなかった。

どんな爆弾だったのか、どれほどの威力だったのか、一瞬にして沢山の尊い命が失われたことは確かな事実であり、とても興味があった。

東日本大震災による原発事故で放射性物質に不安を抱えて生活している今、それ以上に恐ろしい体験をした当時の被爆者の声や、長崎に住む人々の声を直接言葉で聞いてみたいと思い、この研修に参加した。

２　研修の実際

（１）原爆資料館

投下された爆弾の凄まじさを物語る資料が沢山あった。

投下された時間11時２分で止まったままの時計、高熱で溶けて曲がった瓶、熱線を受け沸騰し泡立った瓦、焦げた服、呆然と立ちすくむ女性の写真などが展示されていた。

黒焦げの死体など目を背けてしまう写真も多く、直視することができなかった。

戦争の恐ろしさ、悲しさを痛感し、胸が苦しくなり、二度と起きてはならないことだと改めて感じた。

（２）平和祈念式典

聞こえていますか、被爆者の声が…。

歌ったのは、世界で唯一の被爆者による合唱団『ひまわり』の方々だ。

「もう二度と」という曲の歌詞にはとても悲しみが込められていて、繰り返されている、「もう二度と作らないで　私たち被爆者を」という言葉がとても強く心に伝わってきた。

式典で特に印象に残ったのが、当時６歳で被爆された被爆者代表の方の平和への誓いである。その方には今も影響はないそうだが、被爆三世である幼い孫を亡くし、当時一緒にいた友人もお母さんになってから突然亡くなったそうだ。

原爆がもたらした目に見えない放射線の恐ろしさに苦しみ、悲しみ、しかしどうすることもできないのだと訴えられた。

福島の原発事故にも触れられ、被爆者の心に寄り添い、被爆の実態を語り継いでほしいという言葉に、とても心が締め付けられた。

今を生きる私たちが伝えていかなければならないと思った。

（３）青少年ピースフォーラム

全国から集まった小中高校生の方々と２日間共に学習し、交流した。平和とは何かを考え、班に分かれて発表した。

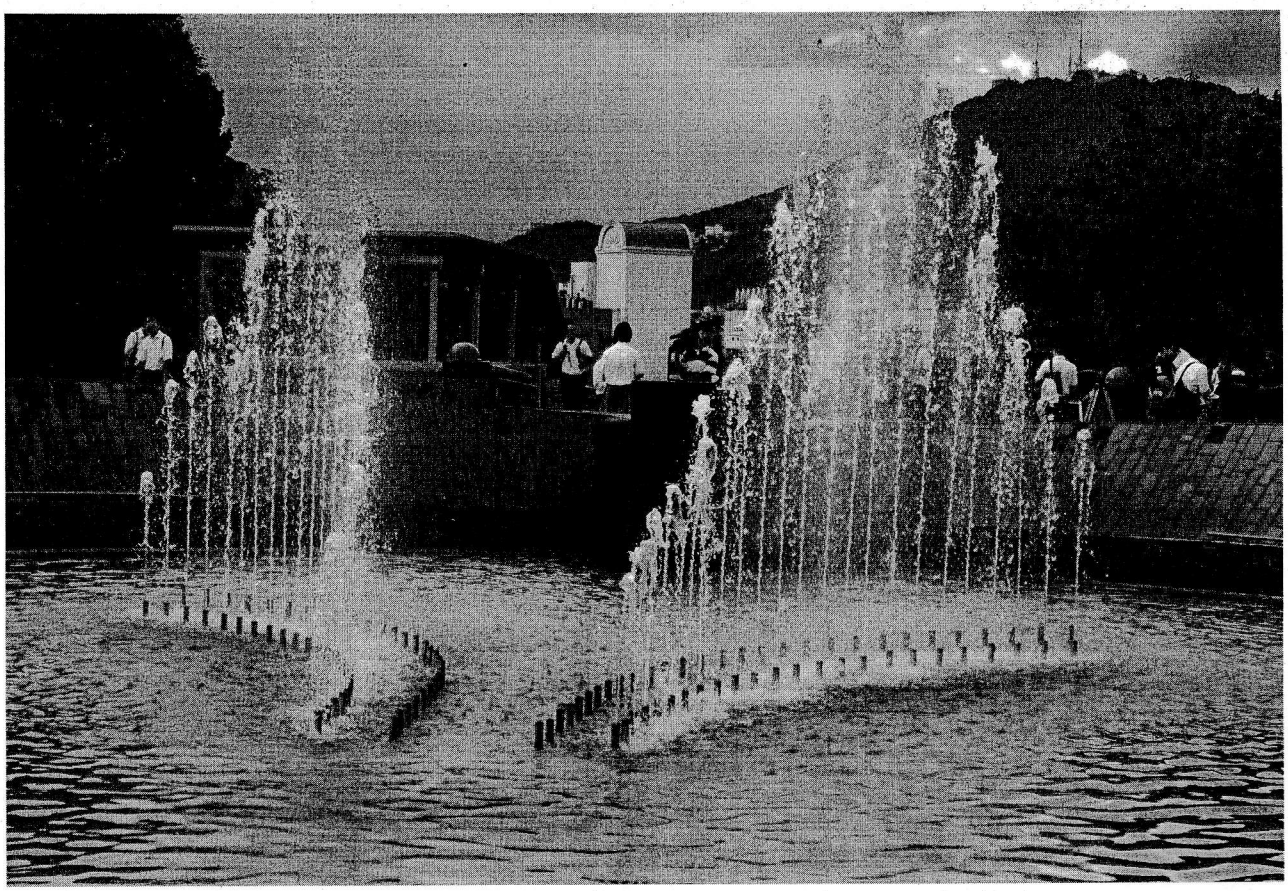
他県の人との話は新鮮で、とても有意義な時間であり、とても勉強になった。

このピースフォーラムで一番印象に残ったのが、被爆者の深堀譲治さんの講話だ。

当時中学校３年生だった深堀さんは、家から３ｋｍほど離れた場所にいたために助かったが、自宅にいたお母さんと買い物に出ていた妹と弟を亡くした。

生き残ったもう一人の弟も、１週間後に『兄ちゃん死ぬなよ』という言葉を残して亡くなってしまったそうだ。

未来ある小さな子供や、何の罪もない人たちを無差別に殺した原爆に改めて怒りを感じ、被爆者である方の話を直接聞いて、現実にあった話なのだと受け止めきれず、ただただ呆然とした。



＜平和の泉＞

3　心に残った風景

水を求めて亡くなっていった方々のために、冥福を祈って造られた噴水である。

塀は鶴をイメージし、水は平和の象徴である鳩が羽を広げ、羽ばたく様子を表現している。すがすがしく、清らかで、美しい、当たり前に見えるこの風景だが、水はとても貴重である。福島に住む私たちも原発事故により水が汚染され、不自由になったことで、苦労した思いがある。

被爆した人々は喉も焼け、熱い中、水を飲むことも出来ず『水を、水を』と言いながら、力尽きて亡くなっていった。

平和がずっと続くことを願い、水の大切さを忘れず、大切に使っていきたいと思った。

4　研修を振り返って

研修を終えて、戦争がいかに悲惨で恐ろしいことであるかを改めて知り、平和の尊さ、そして今、平和な日本に生きていることへの感謝の気持ちが強く湧いてきた。

式典で、長崎市長から聞いた、地元の高校生の合言葉である『微力だけど無力じゃない』という言葉がとても心に残り、私自身も当時の方々の話を忘れず、これからの人々の心にとどめていかなくてはならない、そしてみんなで力を合わせ、一刻も早くこの世から核兵器を無くし、平和の大切さを訴え続けていかなければならないのだと強く思う。

平和であることを当たり前と思わず、幸せの輪を広げて行きたい。この長崎派遣に参加できて、人生観や平和に対する考え方が変わったし、とても勉強になり、本当に良かったと実感した。